

明治末期の鉄道請負業者の 多角化リスク

千葉県船橋の“落ちた偶像”
遠藤君蔵の衰退事例

小川功

Isao Ogawa

滋賀大学 / 名誉教授

I はじめに

筆者は昭和52年以来長らく地縁ある千葉県下の企業活動等に関しオリエンタルランド、三田浜楽園等若干の論考¹⁾を手掛けて来たが、今回はその一環として船橋に豪邸を建て明治期鉄道工事請負に多くの実績を挙げた県下最有力業者の遠藤君蔵という一地方企業家の知られざる盛衰を取り上げた。遠藤の盛名は大正期「煉瓦塀屋敷」として知られ、地元では未だに“赤煉瓦御殿”の主として記憶され、明治末期に突如杳として表舞台から姿を消したナゾの資産家として多分に英雄視²⁾されている節もある。

遠藤は本業の請負の傍ら広範囲に多角化、例えば東京湾岸で製塩業を経営した。彼の名を付した塩田が船橋商業銀行（以下単に船商と略）、京和銀行³⁾等を経て「土地会社を新設し…預金の中より…株式払込に振替」（T13.8.2T）える土地会社方式⁴⁾による破綻整理の過程で三田浜楽園

1) 拙稿「巨大米国系テーマパークの本邦初進出と地域融合－浦安市民の視点での30数年前の回顧」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第26号、平成30年10月、「海浜リゾートの創設と観光資本家－東京ベイ臨海型テーマパークの魁・三田浜楽園を中心に－」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第7号、平成21年3月参照。

2) 新井斌氏は遠藤を単なる一介の土建業者ではなく「銀行の設立に尽力するなど、船橋の指導的立場の事業家・政治家」（「遠藤君蔵と赤煉瓦」『資料館だより』64号、船橋市郷土資料館、平成7年3月、p1）と評し、「赤羽鉄道工事中、不慮の失敗を招き、船橋商業銀行の閉鎖とつまづき、一瞬にして栄光の座からすべり落ち」（「赤煉瓦」『史談会報』船橋市史談会、昭和49年5月、p1）たと悔やむ。

3) 京和銀行は拙稿「多店舗展開型銀行のリスク管理－大正期の京和銀行を中心に－」『彦根論叢』第374号、平成20年7月参照。

4) 土地会社方式は拙著『企業破綻と金融破綻－負の連鎖とリスク増幅のメカニズム－』九州大学出版会、平成14年、P505以下参照。

5) 遠藤寛夫『先駆者の旗－丹沢善利伝－』昭和45年、p392。

6) 令和2年2月28日地方金融史研究会の例会で報告の予定が中止となり10月23日リモート形式で再開。

に変容する。また遠藤浜11万坪も丹沢善利が継承、オリエンタルランド原始大株主として著名な船橋ヘルスセンター⁵⁾へと姿を変えた。その意味で遠藤ら塩田経営者が広い海原に蒔いた種は現在東京ベイエリアで威容を誇る巨大海浜リゾートの原型へと順次変容していく。

本稿は上記の如き特異な産業立地変遷現象の淵源を成す船橋近辺の郷土史のナゾ解きから出発し、遠藤組の破綻要因を分析、中堅請負業者が陥った多角化リスクを主にガバナンスの不全という視点から解明しようとする試論である。遠藤組のメイン行・船商の本件と表裏一体の連鎖破綻⁶⁾に関しては別稿を予定している。

以下、本稿では数少ない同時代人の証言として遠藤組使用人であった白井保四郎(白井建設の創業社長)の口述による自叙伝⁷⁾を単に「白井」と略したように類出する基本資料を略号⁸⁾で示し本文内に示した。

7) 白井保四郎口述・加瀬俊雄編『ぼうふらの記 白井保四郎伝』昭和43年、私家版。

8) 以下の略号を使用した。京浜…『京浜実業家名鑑』明治40年、p575、辞書…『房総人名辞書』明治42年、千葉毎日新聞社、p420～1、富源…『常磐炭砒一覽』大和田与平『磐城之富源』清光堂分店、大正4年、砂利…『経済調査第1編 砂利に関する調査』第1巻、東京鉄道局運輸課、大正14年、辞典…『船橋人名辞典』第1巻、昭和40年、業史…『日本鉄道請負業史 明治篇』鉄道建設業協会、昭和43年、おやけ…『おやけこういち』常磐地方の鉄道』私家版、昭和62年、仙鉦…『仙台鉦務署管内 鉦区一覽』仙台鉦務署、D…ダイヤモンド、T…『東洋経済新報』、B…『銀行通信録』、東朝…『東京朝日新聞』、東日…『東京日日新聞 房総版』(①は大正6年7月22日)。

[会社録・会社基本資料]日韓…鈴木庸之助編『日韓商工人名録』実業興信所、明治41年、要…『銀行会社要録』東京興信所、帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所、諸…牧野元良編『日本全国諸会社役員録』商業興信所、商工…『商工信用録』東京興信所。

[史・資料]上申…大正6年9月14日付大蔵大臣宛船商『上申書』(千葉県行政文書『商工永久 別冊八下』千葉県文書館)、答申…大正6年8月20日付山崎専務名答申(前掲、別冊八下)、船商#38…大正6年6月30日現在『大正六年上半期 船橋商業銀行第三十八期営業報告書』(上申)、船商#39…大正6

II 遠藤君蔵の事績

遠藤は慶応3年北埼玉郡岩瀬村に生れ(京浜、辞書)、「埼玉一円に勢力を張っていた土工の親分」⁹⁾羽生重兵衛の組下となって「羽生身内(羽生一家)」(白井、p63)として働くうちに「真面目で頭も切れる」(白井、p64)と見込まれ縁続き¹⁰⁾となった。明治14年遠藤は独立、「千葉県に住いを定め…船橋町本町に夫婦で居を構え遠藤組と名乗」(白井、p64)り、請負を始めた。各現場で配下の労務者を多く使う請負業は元請—下請—孫請という「組」組織相互の重層構造を特徴とする。遠藤組土工集団の中核をなすのが加瀬吉松率いる「組直」加瀬組と、羽生系統の幕田組が双壁で「二大番頭」と称された。「加瀬組長と共に左右の腕と称せられた」(辞典、p39) 古参の田沼貞之助は栃木県河内郡幕田村(現宇都宮市)出身で明治24年遠藤組に入り、また「遠藤組の柱石として斯界に令名ある」¹¹⁾東京出張所主任・市村丈男¹²⁾も明治26

年12月31日現在『大正六年下半期 船橋商業銀行第三十九期営業報告書』、東葛#1…『第一回営業報告書』東葛人車鉄道、明治42年12月、東葛#8…『東葛人車鉄道 第八回営業報告書』大正5年12月、商登①～⑥…閉鎖商業登記簿(①大正5年12月設立の合資会社遠藤組、②船橋商業銀行、③昭和2年3月設立の合資会社遠藤組、④石城採炭合資会社、⑤千葉県塩壠合資会社、⑥上遠野炭砒合名会社)、不登①～②…閉鎖不動産登記簿(①船橋町浜田2720番1塩田、②船橋町九日市1223番遠藤邸)、台帳…1223番遠藤邸旧土地台帳。

9) 羽生重兵衛は水防工事の多かった利根川沿岸を拠点として発展した北関東の土工集団の著名な大親分(竹田米吉『職人 一建築家の回想』工作社、昭和33年、p143～5)。

10) 遠藤は引退する羽生重兵衛からその愛妾=「親方のお古を有難く拝領に及び、羽生の職域の一部を譲渡」(白井、p63)された。

11) 16) 毎日通信社編『日本之精華』毎日通信社、大正3年、埼玉県、p16。

12) 市村丈男は総武鉄道工事で昇進し出張所主任を歴任、指名停止時にダミー(白井、P91)として房総西線工事を市村組で請負う等、遠藤の弟(白井、P90)との噂もある最側近で石城採炭、兎美炭砒各出資社員。

年組員となったから、この頃集団の基礎がほぼ形成されたとみられる。

軍隊的上下関係組織を指揮し得る勇猛果敢な連中に加え、遠藤組が本業以外の副業に手を広げるに伴い、本部で遠藤を補佐するスタッフ組織の頭脳集団が別に必要となる。たとえば遠藤組支配人小島弥平次(八栄村)は「遠藤運送部」津田沼駅支店・主任¹³⁾、「遠藤組の弁護士といわれ…博覧強記の頭脳の持ち主」(白井, p80)で明治32年世話人として神社境内庚申塔を寄進、東葛人車鉄道に10株出資、遠藤君蔵の代理として「有限責任東葛飾郡購販売組合」座長¹⁴⁾を務めるなど地域社会の窓口として専ら対外的活動を分担した。

明治26年4月 遠藤は本格的な鉄道工事の元請実績として初めて市川千葉間「総武鉄道線路の敷設を請負」¹⁵⁾って高い評価を得、「爾来千葉県下に於ける大小土木請負事業は其十中の七八を一手に占得」(辞書)した。明治34年遠藤組は県内に飽き足らず東京出張所を設置し、東京での受注を積極化した。この結果「全市中に遠藤組の工事を見ざることなく、関東一流の請負業者」(辞書)となり「我土木建築請負業界の覇を以て称せらるゝ清水、有馬の両組と駢馳し、其軒輊を認めざるものを遠藤組となす」¹⁶⁾との美辞麗句で評された。東京支店に昇格した頃のスタッフは盛田富五郎、豊島争之助らで、後年多角化戦略を担った実行部隊も東京支店詰であったと思われる。このほか明治27年1月房総鉄道、関西鉄道奈良延長線、東武鉄道、鉄道連隊、東葛人車鉄道など多くの鉄道工事も請負った。

遠藤組の施工は「堅牢確実の称あり同業者間其の隆盛に驚嘆せざるはなく…一大雄将を以て見

る」(京浜)急成長の原因は「組員の熟練勤勉とにある」(京浜)とされ、「工事の迅速と堅牢確実を旨とせしかば遠藤組の信用は愈々益々公私の間に認められ…当代請負業者の偉材」(辞書)と賞賛された。実例として習志野で「三十万円にて船橋町の土木受負業遠藤君蔵氏其工事を受負ひ居るが、去月二十一日よりは夜業迄をして取急ぎ一千余名の職人焚火やカンテラを便りにセッセと働き居り様、恰も木下藤吉が清洲城建築を目の当り見るやうな思ひあり」¹⁷⁾と、出世頭の秀吉並みに形容された。こうして“軍都”千葉の地の利を活かし遠藤組は鉄道連隊、第一・第二旅団司令部、大塚弾薬庫、板橋火薬製造所、習志野俘虜収容所など軍工事を次々に手がけ、「蓋し君の如き急速なる成功者は最も稀」(京浜)とされるなど、半ば偶像化しつつあった。白井も「遠藤組は多くの工事を特名…でもらい飛ぶ鳥も落す勢い」(白井, p64)だったと黄金期を回顧する。一時期「関東一流の請負業者として旭日昇天の勢ひ」(辞書)であった遠藤の運命が明治末期に突如狂い始め、大正期には確たる消息は途絶えがちとなった。大正3年1月信用調査では正味身代未詳、商内高未詳、所得税…、取引先の信用の程度5段階の下から2位Da(商工T3, p15)と往年の栄華とは程遠い不冴えな有様であった。以後も商業登記簿上、第二・第三の後継企業役員に名を連ねるも労務出資社員に止まり、債務弁済未了の正味身代未詳を意味する“非公然”身分で低迷したと想像される。大正10年11月船商の清算終了後、昭和初期に至り訴訟関係が一段落したためか遠藤は昭和5年3月28日合資会社遠藤組代表社員に就任(商登③)、晴れて復権を果たしたのも束の間、翌6年4月15日遠藤組「代表社員遠藤君蔵ハ…死亡」(商登③)、翌々日

13) 『全国運送取扱人名簿 第七版』全国運輸連合会、明治44年, P193。

14) 『松戸市史 下巻第二』昭和43年, p668。

15) 『船橋市史 前編』昭和34年, p394。

17) 『習志野市史 第4巻』平成6年, P463。

の4月17日後継者の遠藤総雄が遠藤組代表社員に就いた。

Ⅲ 遠藤君蔵の多角化の実態

遠藤の展開した事業(金銭・労務出資会社を含む)は中堅請負業者として相当多岐に亘る。判明したものを年代順に挙げれば明治33年以降に星野家より二和開墾地を買収(41年以降開墾分譲)、37年両国橋駅で運送店開業、石城採炭合資設立、38年松本岩次郎と共同で塩田開業、千葉県塩売捌合資設立、39年兎美炭砒合資設立、42年東葛人車鉄道の運輸業務受託、大正初期板谷峠山林を買収、製材業を企画したほか、東京煉瓦、栃木県下の砂利会社等各社に出資といった具合である。個人企業であり各事業の経営数値は得られないが、明治40年の営業税は①船橋町の土木請負業1,261円35銭(日韓下, p20)、所得税1,603円13銭、②神田区の土木請負業27円69銭(日韓上, p125)、③津田沼町「馬糧」18円57銭(日韓下, p18)等が判明する。上記以外の遠藤の兼務役職は東京煉瓦取締役、東洋コンプレッソル監査役など。ほかに一般的な株式投資先として、明治40年9月国有化された総武鉄道650株、東葛人車鉄道20株(東葛#8)、船橋鉄道②500株主(帝T5, p7)、船商⑤105株主(船商#39, p5)など。

白井は自己の勤務した法人格なき対外的呼称「遠藤運送部」の実態を「本店を東京の本所錦糸町におく運送店で、土建業遠藤組の運送部門を担当、その姉妹会社」(白井, p61)と形容するので、各部門ともある程度自主裁量に委ねたのであろう。また習志野台地に展開した陸軍の御用を承る用達業を「馬糧 遠藤君蔵出張店」(日韓下, p18)と

名乗り津田沼町に置いた。これらに倣って遠藤個人事業の全体像を模式的に描いてみよう。(実際に名乗った「マルエ・遠藤運送部」以外の“○○部”は筆者による便宜上の仮称)

(1) “本部”

明治35年2月船商頭取の松本岩次郎より購入した繁華街に立地する「船橋の邸宅は曾て宮家の御宿を承はりし光栄を有」(辞書)し、この豪邸に遠藤君蔵事務所を置き遠藤弥市、岩崎良之助、作田潔、赤坂信二ら番頭・手代格の側近を擁し、指令を発した。「幾十万の富を蓄積し、東京市及び千葉県其他に多くの地所家屋有す」(辞書, p304)る千葉県出身実業家中の成功者・中山佐市¹⁸⁾は銀行員の傍ら麻布の自邸に「中山地所部」を置き、二男の佐々雄(明治42年慶大出身)を配して副業に励んだが、彼の影響を受けた可能性もある遠藤も同様な手法を模索したと思われる。

(2) 遠藤 “地所部”

明治33年星野清左衛門次男・星野天知より船橋市二和の開墾地に「目をつけ、捨て値のような価格でこれを買収」(白井, p84)した。明治41年ころ支配人小島弥平次が遠藤の命で150町歩を開墾、130町歩を「区画を整理して希望者に分譲…遠藤組は大いに利益を挙げ」(白井, p84)、残る20町歩を小作地次いで小島は自営農場とするも共に失敗した。大正5年没落した遠藤は細川久助に開墾地を売却したが、その後別荘開発業者の新那須興業が夢物語に近い成田急行電鉄新線計画を誇大に広告した「駅前」「栄和荘分譲地」計画を勝手に進め、昭和4年3月小作争議が勃発した¹⁹⁾。

¹⁸⁾ 中山佐市は銀行局下級官吏から東京府農工銀行設立時に支配人となり明治45年頭取昇任の傍ら農工貯蓄銀行専務、東洋製材、門司船渠各取締役、東洋硝子、千代田瓦斯、横浜電気鉄道各監査役等多数役職を兼ね、「中山筋」「農工筋」と称された投機家。頭取辞任後も北海道採炭社長、門司興業取締役、横浜電気鉄道、大東ビルブローカー銀行、日

東保証信託、塩原電車各監査役、横浜土地等の役員。

¹⁹⁾ 天下井患『二和・三咲の歴史』昭和58年, P74。

(3) 遠藤運送部

遠藤の多角化戦略も当初は不便な津田沼駅などに特命工事の施主たる陸軍の要望を聞く「物品供給請負」「馬糧(用達業)」の延長線上に大株主でもあった「旧総武鉄道沿線枢要の各駅に遠藤運送部」(辞書)という形で明治37年創業、順次両国橋、本所、市川、中山、津田沼に出張店を展開、白井ら有能な店長に運営を任せ地味ながら安定収益を得ていた。

(4) 遠藤“軌道部”

本業の請負の延長で「労力供給請負」即ち人材派遣業も兼営した。判明するのは敷設を請負った東葛人車鉄道で明治42年9月28日深町～本田間開業後も「トロ人夫受負」業務を行ったが、12月10日東葛は「遠藤組ノトロ人夫受負ヲ解除シ本社ノ直轄トシ、労銀支給ノ方法ヲ革新」(東葛#1)した例である。遠藤組が東葛の敷設工事に建築途上の軌道をレール・資材運搬作業に使用したのを単に暫時継続したものであろう。

(5) 遠藤“鉱業部”

遠藤が役員として関わった炭鉱は少なくとも福島県石城郡内に3坑(窪田村、赤井村、上遠野村)が『鉱区一覧』で確認できる。明治44年10月市村丈男名義で試掘中の福島県南会津郡館岩村湯ノ花の銅硫化鉄「登657番」(仙鉱M45, p46, T2, p50)(大正2年現在出願中2件)など、石炭以外にも試掘の可能性がある。鉱業権が本社所在地を異にする3社に分かれたのは情報入手先²⁰⁾、共同経営者の差異等の都合かと思われる。陸軍用達業の延長上、納める石炭の自営を図ったとも考えられるが、銅鉱にも触手を伸ばすなど動機は判明

しない。従前の郷土史の文献では炭坑関与には言及されておらず、また部下だった白井の回顧談にもないことから、「遠藤の実弟」(白井, p90)とも噂された市村丈男など身内を役員に起用するなど当時は極めて内密な私的投資であったと思われる。

唯一、第二会社設立時の営業目的の二番目に「鉱山採掘及鉱物売買」(商登①)を掲げたことで遠藤組が実は本業とは無縁の“不良在庫”のヤマを抱え込んだ事実を告白せざるを得なかった。こうした一連の秘匿傾向から判断し未経験の鉱山業に遠藤が甘言で誘い込まれ、いわば一攫千金を狙う投機だったかと疑われる。しかしいずれのヤマも結果として不振、水没、鉄道網から隔絶した立地上の輸送費倒れ等で試掘にとどまるなど、①出蔵を除き極めて短期間の稼業に終わる貧鉱揃いであった。②兎美(登100番)は大正6年やっと思われたものの、鉱業金融に狂奔した日米信託が買鉱・開山資金に40万円も融資(T9.8.11D)する大戦景気の産物にすぎなかった。また立地難で長く休業中の③上遠野(採掘登195番)に至っては遠藤組により大正6年「二月事業ニ著手」(趨勢T6, p193)しながら戦時下の昭和17年頃になってようやく愛沢信公へ売却できたように鉱区売却は概して難航した。大正3年時点で上記の館岩村で銅鉱2件試掘出願中²¹⁾だが、大正5年には試掘・採掘権とも該当なく直後に撤退(鉱区税不払等で抹消)したと思われ、炭鉱・金属鉱とも巨額投資が回収できた可能性は極めて低く、遠藤組没落の主因をなしたと考えられる。

①石城採炭合資会社(勿来・窪田)

おやけこういち氏によれば「明治37年、石城採炭(合資)が設立され、本格的に採炭が始まると勿来駅と山元3マイル11チェーン(5,048m)の間に

²⁰⁾ 日本鉄道海岸線の駅舎建築、枕木を請負った松本孫右衛門が関わった三星炭鉱も明治32年日鉄貨物駅があり常磐炭集積地たる地方橋場に設立されるなど、当地を根城とする石炭商が炭鉱投資にも介在か。

²¹⁾ 『南会津郡郷土誌』南会津郡役所、大正3年, p373。

馬車軌道が敷設された。明治39年のこと」(おやけ, p139) とされる。石城採炭の立地した窪田村出蔵は後年の継承者・大日本炭硯勿来坑の沿革の項に「明治三十年頃ヨリ共露頭附近ニ於テ姑息的ニ探掘セラレタルカ微々トシテ振ハサリキ、明治三十七年遠藤君蔵ノ手ニ帰シ石城採炭合資会社ト称シ新ニ斜坑ヲ開鑿シ勿来駅迄専用運炭軌道ノ開通ヲ見ル」²²⁾と伝わる。おやけ氏によれば「馬5, 6頭が2組に分かれ、1日3往復。窪田村小島地区に交換場があった」(おやけ, p139) とされるが、「馭者を直接雇う方法」か否かは言及していない。

明治38年11月25日 石城採炭合資会社が「石炭採掘販売」を目的に現勿来駅前に相当する福島県石城郡窪田村大字関田字寺下81番地ノ4に資本金2.4万円で設立、代表・無限責任社員遠藤君蔵が1.2万円出資、有限責任社員服部金松が1.2万円出資、ほかに市村丈男、盛田富五郎、山崎元之助(商登④)。その後の消息は「幾何モナク江森盛孝²³⁾ノ所有ニ移リ…明治四十年九月勿来炭硯株式会社ニ併合シタリシモ依然事業不振ノ俣中止」²⁴⁾された。元鉄道技師の江森とは交流があった筈で、当初から地元選出代議士の江森との連携による専用鉄道前提の採炭か、遠藤の資金難で譲渡担保で融通を受けたか、単純な転売か不明である。明治45年5月平銀行を後楯とする勿来炭硯は三星炭硯(大正6年9月大日本炭硯に吸収合併)に吸収併せられ、「勿来駅ノ西方三哩二十鎖ノ処ニアリ、三星炭硯専用軌道ニヨリ鉦山停車場間ヲ連絡」(趨勢T6, p319) との三星・窪田炭硯(後の大日本炭硯・勿来坑)に専用軌道ともども継承された。三星側報告では「本<窪田>炭硯ハ元勿来炭硯ト称シタルモノニシテ明治四十四年従

来ノ採炭計画ヲ一変」(趨勢T1, p308)、斜坑を開鑿、坑道を延長した。

鉄道敷設を本業とする遠藤の石城採炭が地元で「黄線」と通称された出蔵坑と綴駅とを結ぶ自社運炭のみの専用軌道を単独形態で立派に新設し、改軌やルート変更を経ながらも長く続いたことは地元で「明治三十七年遠藤君蔵といふ人が大仕掛に採炭したのが始まりで、今日に及んでゐる」²⁵⁾と伝承されている反面、膨長する投資額を共同利用形態の「勿来軌道のように多くの小・零細炭硯が利用することはなく」(おやけ, p139) 敷設コストを全て自社で負うほかなかった。これに対し窪田村中野炭坑を持つ中野喜三郎や沿線中小炭坑主が株主兼大口荷主となり、軌道法により道路上に併用軌道を格安に敷設した勿来軌道は開業初年度から利益を出し、大正7年には十数坑に達する「付近炭硯ノ勃興ニ伴ヒ輸送力ニ不足ヲ告クル」(趨勢T7, p175) 程だった。

同じ請負業界の中野らと協調し勿来軌道に出資・利用し、万事「大仕掛」を避け「何でも炭山の方の費用が安ければよい」²⁶⁾ 広部鉦業流に専用軌道の敷設コストを節減する策は採れなかったものか。おやけ氏は別の常磐炭硯合資の過大投資ぶりを「専用鉄道を敷設した」ヤマは「大手炭硯であり、同炭硯の無理は当初から見えていた」(おやけ, p33) と評したが、江森元技師の後援もあり鉄道を自ら築いて来た全盛期の遠藤は清水・有馬両組にも劣らぬ一流ゼネコンとの自信過剰に陥っていた故の強硬策だったのであろうか。

② 兎美炭硯合資会社(赤井村畑子沢)

明治39年11月設立 石城郡赤井村畑子沢付近で「兎美」鉦山(採掘中)、代表社員遠藤君蔵(無)、出資社員奥村貞二郎、市村丈男、山崎元之助で

22) 24) 商工省鉦山局編『本邦重要鉦山要覧』大正15年、P667。

23) 江森盛孝は磐越西線工事等に関与した元鉄道技師で明治31年出身地福島3区選出代議士、請負業に転じ44年7月鉦山業をも営む(資)盛孝組を設立し無限責任社員(諸T5下, p332)。

25) 『郷土読本』福島県石城郡教育会、昭和11年10月、p17。

26) 里見敬二『日本炭硯行脚』帝国新報社、大正8年、p187。

あった。明治44年「兎美炭砒合資会社」が鉱業権者の赤井村の鉱区は坪数50,322坪の鉱区番号「登100番」石炭鉱山「兎美」(採掘)の鉱産額「石炭1,644,852斤」(仙鉱M45, p117)であった。

同村内の三星炭砒赤井坑は「事業ヲ縮小シ又ハ休止シタル鉱山」の項で明治43年6月「断層ニ遭遇シタル為メ…採炭ヲ休止」(趨勢M43上, p84)とあり、大正2年内郷村綴坑でも断層に突当り熱水が流入して閉山、全坑売却の危機に陥った。松本孫右衛門から懇願された北浜銀行頭取岩下清周が5万円を出資し取締役に就任した“悲劇の炭鉱”三星炭砒株は無価値と見做され、北銀破綻時に同株式は私財提供財産から除外された。兎美も三星と同様に当地固有の断層湧水リスクを蒙った可能性もあろう。

兎美鉱山の鉱業権(登100番)は大正4年柳内兵右衛門外一名(石城郡小名浜町字定西)(富源, p111)を経て山本佐次郎(朝日炭砒社長)へ移転、大正5年11月「久シク休業中ナリシカ…斜坑ニ依リ採炭ヲ開始」(趨勢T5, p182)、さらに大正6年4月設立の朝日鉱業へ移転、朝日側の報告には「元宝山及畑子沢炭砒ト称シ稼行セルモノニシテ、六年中当社之ヲ買受ケ合併シテ朝日炭砒ト改称…当社買受当時畑子沢坑ハ水没ニ帰シ居リ」(趨勢T7, p177)とある。これらから兎美坑はやはり「久シク休業」「水没」状態にあったと推測される。同時に宝山坑運営の宝山炭砒が設立された。朝日鉱業は隣の常磐炭砒と工事費折半で赤井駅～赤井村畑子沢間約2kmの朝日鉱業名義の専用鉄道免許され、敷設開始した(おやけ, p33)。

③上遠野炭砒合名会社(上遠野村)

明治44年「遠藤君蔵外一名」が鉱業権者の上遠野の鉱区坪数819,655坪の鉱区番号「登195番」

石炭鉱山(採掘)は鉱産額「…(空欄)」(仙鉱M45, p120)で、休止状態であった。大正四年東京、仙台両鉱務署の鉱区一覧では「(砒山名)空白所在町村(石城郡)上遠野(村) 鉱区坪数819,655 鉱業権者 遠藤君蔵外一名 住所 千葉県船橋町」(富源, p113)となっていた。

大正5年12月頃石城郡上遠野村の上遠野鉱山(登195番)の鉱業権が「遠藤君蔵外一名」の個人名義から「鉱山採掘及鉱物売買」等を目的の「合資会社遠藤組」法人名義へ移転した。大正7年5月13日麴町区平河町に遠藤を労務出資社員とする上遠野炭砒合名会社を設立、共同代表社員・齋藤亨らであった²⁷⁾。

(6) 遠藤“製塩部”

明治38年2月小川紋蔵より購入した塩田で船商頭取・松本岩次郎と共同で製塩業を始め、同年6月販売部門の千葉県塩売捌合資²⁸⁾も松本らと共同設立した。明治40年時点で遠藤は津田沼製塩の監査役も兼ねていた。松遠塩田、遠藤浜等と呼ばれた一連の製塩業にも遠藤組没落の大波が押し寄せ、まず大正3年3月末千葉県塩売捌合資で代表社員松本岩次郎が除名、遠藤ら3名退社、翌4月1日合資会社船橋塩元売捌所に改称した(商登⑤)。大正4年1月16日遠藤に対する競売も始まり3月20日塩田は加瀬定治郎が競落(不登①)、また船商が競落の後、柴田柳三郎へ移転した。大正6年10月大きな高波が発生し施設が流失、遠藤浜の損害は1.3万円に上った。

(7) 遠藤“山林部”

遠藤組が(2)の“地所部”とは別に山林経営にも関わったことは、第二会社三番目の目的に「山林

²⁷⁾ 共同代表社員6,500円出資・齋藤亨、共同代表社員6,500円出資・内山弥左衛門、5,000円出資社員川嶋佐一、2,000円出資社員実方誠(商登⑥)。遠藤との関係未詳ながら、鉱区持分の譲渡目的か。

²⁸⁾ 資本金30,015円、代表社員松本岩次郎4,000円、無限責任社員遠藤君蔵3,375円、同松永定次郎2,250円、同小川紋蔵1,500円、同福田友蔵1,200円(商登⑤)。

伐採及木材製作并其売買」(商登①)を掲げたことから窺える。具体的に判明したのは転売され続けた「訳あり物件」たる板谷峠だけだが、以前より投機的な山林売買を指向、各地で取得を推し進めた一端が露呈した例と思われる。明治43年以降に遠藤は山形縣南置賜郡山上村の板谷峠付近の山林を野村(八戸)から購入した。現地は標高622mの奥羽本線峠駅から1~3里奥に位置し冬期の豪雪で山元から駅までの木材搬出に難あり、当初運材を企てた田中(相馬郡)、金子(東京)ら「幾多経営者ハ各資金難ニ陥リ中途ニシテ事業中止ノ状態」²⁹⁾であった。「東京ノ土木請負業遠藤組等…孰レモ前記ノ障害ニ逢ヒ収支償ハズ半途ニシテ蹉跌」³⁰⁾したと推測される。遠藤が断念した後、「東京市山田鍼次郎氏ニ於テ約六十萬ノ経費ヲ投ジ工事中ノ木材搬出用索道ノ竣成」³¹⁾を成功させたから、断念の理由は索道等の敷設工事を本業とする遠藤にとって技術面でなく当時の資金難が原因であったとみられる。

(8) 明治砂利(株)

明治砂利は白井の記憶では「鬼怒川砂利の販売を一手に引受けてきた会社で遠藤君蔵も大口出資者…砂利販売界の関東での大手」(白井, p117)という。配下の遠藤弥市は明治40年8月渡良瀬川で砂利採取を創始(砂利, p229)、船橋鉄道に砂利、枕木、電話等の物品を納入した業者であり、また市村丈男も同川で砂利採取(砂利, p227)、後年に運搬用の専用鉄道を敷くなど密接な関係にある。一方、資料上は別に思川砂利合資が改組し15町の馬車軌道を敷いた巢鴨の明治砂利(株)(砂利, p113~116)がある。大正10年頃「明治砂利株式会社」が倒産(白井, p117)との回顧が思川

砂利の改組に該当すれば両社は一致する可能性があるが、詳細は未詳である。

IV 遠藤君蔵の破綻経緯

かつて遠藤組の手代であった白井保四郎は「さすがの大組遠藤組はその屋台を保ちきれず、忽ちにして崩壊した」(白井, p106)と、大正5年時点の文脈で「崩壊」という表現を用いる。しかし蹉跌に屈することなく第二、第三の後継企業³²⁾を次々設立し続けて、形式的には遠藤は昭和6年死ぬまで遠藤組代表社員として活動し続け、また第二会社・合資会社遠藤組は形式上存続扱だから、遠藤個人ないし個人企業たる「遠藤組」の破綻時期を正確に把握するのは困難である。

ここでは大正5年12月9日遠藤が「船橋町随一の建築物たる…煉瓦塀屋敷」(東日①)を代物弁済取得により、「落城」を余儀なくされて、東京支店の所在地・東京市神田区千代田町4番地に逃げ込み、4日後ここに新たに遠藤を代表者とする合資会社遠藤組の旗揚げを余儀なくされた時点を、一応船橋本店時代の“大”遠藤組の破綻と捉えた。以後は東京本店時代の遠藤組(第二次)が開始され本店所在地も東京市内を転々とするが、残念ながら再起空しく名声・規模ともに往時には遠く及ばなかったと見られる。

しかし「煉瓦塀屋敷」「落城」から遡ること数年前、その遠因として明治43年7月遠藤は盛田、豊島等の使用人と「相謀り」赤羽火薬庫工事³³⁾贈収賄事件に深く関与した旨、クロの司法判断³⁴⁾が下っていた。

この事件の裁判が開始され、遠藤組の信用が失墜し、官公庁工事から締め出されつつある明治

29) 30) 31) 昭和8年12月20日峠驛長報告『峠駅沿革誌』(栗野宏「鉄の道と鉄道-滑川鉾山と板谷峠の文化的景観」『山形大学紀要(人文科学)』第16巻3号, p72~3所収)。

32) 昭和2年3月30日別法人の合資会社遠藤組が京橋区出雲町1に土木建築材料販売業を目的に設立。

33) 明治41年12月2日 遠藤組は初めて第一師団より赤羽火薬庫工事を請負(陸軍省文書)。

34) 明治44年3月14日東京高裁で遠藤組幹部3名に有罪判決(陸軍省「壹大日記」明治44年3月27日陸軍次官宛司法次官通牒)。

45年3月30日主力取引銀行の船商も「遂に帳簿整理の為め向ふ三十日間臨時休業」(M45.4B)に追い込まれた。その直接の原因は同行「頭取松本岩次郎氏が本<明治45>年一月二十日突然行衛不明となり、已むなく他の重役にて行務を執り来り」(M45.4B)、同年2月14日同行「取締役松本岩次郎辞任 右明治四十五年二月二十日変更登記」(商登②)という銀行史上でもほぼ前代未聞の不祥事たる頭取逃亡騒ぎにある。

この間、当該事件による混乱のためか千葉県庁にも臨時休業以後、数期間の営業報告書が提出されなかった(あるいは監督不行届を付度した公文書廃棄の)ため休業原因の真相は判明し難い。船商は「遠藤君蔵氏ニ対スル貸付金二三五、六八八円八一〇ノ内公正証書トナリ居ル七五、〇〇〇円〇〇〇ヲ除キタル残額ニシテ、絶対ニ回収ノ見込無キ」(答申)160,688円81銭を従来から「滞貸付金」に計上していたが、大正6年春の総会で「全人<遠藤>ニ対シ免除シヤルベキ旨ノ決議」(答申)を行い、破綻寸前の6年3月1日臨時総会においてようやく「滞貸償却金」として「金十五万六千八百八十八円八十一銭ヲ欠損金ニ計上」(船商#38)した。先行研究者の加藤隆氏は遠藤への「膨大な融資は、恐らく松本との関連があり、長期にわたる累積であったとはいえ、異常である。これは、松本を主導者とした同行の設立事情もあって、さげえないことであったのかも知れない」³⁵⁾と遠藤との取引の異常さを指摘する。

明治45年1月の松本頭取逃亡の原因が1年半前の遠藤の判決→業績急落→大口融資焦付という単純明快な因果関係に立脚していたことは以下の記事よりも類推することができる。「(煉瓦塀)屋敷は遠藤組より船橋商業銀行に三万余円の担保と

して提供しありたるも、期限満了し担保流れとなり、遂に船橋商業銀行の手に渡りしものにて、曩に頭取松本岩次郎が逃走以来、幾多の秘密が暴露し、益々整理困難に陥りたる同銀行は、直に同屋敷を売却し行務整理の一部に供せん」(東日①)

要するに遠藤とただならぬ癒着関係にあった頭取松本岩次郎³⁶⁾が推進した遠藤組への大口融資が焦付いた責任を問われ逃亡、同行は臨時休業に追い込まれ、以後同行は絶えず不良債権処理に苦悶しつつ次第に破綻へと進み、遂に大正6年9月3日「千葉県船橋商業銀行(資本金二五〇、〇〇〇円)曩ニ疑獄事件発生シ重役ノ収監ヲ見タル同行ハ三日営業停止ヲ命」(T6.10.15B)じられ、大正7年5月30日「株主総会ノ決議ニ因リ…解散」(商登②)、6月13日解散登記という、よくある転落の構図である。

しかし同行の後継頭取らは依然大口債務者で地元有力者たる遠藤側と狭い地域社会で切りたくても切れない、幾重にも情実が絡み合った泥沼の如き関係にでもあったためか、「前期以来整理中ニ属シ多年懸案タル遠藤君蔵氏ニ対スル貸付」(船商#38、営業ノ景況)235,688円81銭に対して急激な債権回収には走らず放置し続け、時には融和策として「殊ニ今<大正6年>春ノ株主総会ニ於テ此ノ部分ハ全人ニ対シ免除シヤルベキ旨ノ決議」(船商#38、備考1)までするなど、あくまで微温的な整理態度に終始した。

この結果「多年の懸案」はあたかも致命傷の“腫れ物”に恐る恐る触るかのごとく極めて慎重且つ秘密裏に内々ことを進めた結果、営業停止段階でようやく「永年に亘る幾多の秘密暴露せられ」(T6.9.4東日)たように解される。例えば大正元年10月13日同行の後継頭取岡田耕平は船橋町長を

35) 加藤隆「船橋商業銀行についての覚書」『史談会報』第7号、船橋市史談会、昭和60年3月、P23。

36) 松本岩次郎(船橋町九日市)は穀物商・塩商、船橋商業銀行頭取、千葉県農工銀行監査役、千葉県塩売捌代表社員ほか。

柳橋の一流の待合「稲垣」に招待し公金の預入を懇請、同席の遠藤は裁判で「銀行ノ信用ヲ増シテ貫フ為メニ役場ノ公金ヲ預ケ入レテ貫ヒタイト懇懇依頼セシトコロ松本<教蔵>ハ承諾セリ」³⁷⁾と供述した。株主ではあっても銀行で何ら役職のない大口債務者・遠藤の異例とも思える極秘接待の場への同席の意味するところを原判決は「株式会社船橋商業銀行頭取岡田耕平及ヒ同銀行ノ盛衰ニ至大ノ利害関係ヲ有シタル遠藤君蔵カ…公金ヲ預入レラレ度旨懇請」³⁸⁾したと表現する。単なる推測にすぎないが運命共同体として「同銀行ノ盛衰ニ至大ノ利害関係ヲ有シタル遠藤」が、恰も高知商業銀行と「同銀行の大恩人なりと思惟」³⁹⁾する石井定七との悪名高い醜関係のように、皮肉にも同行経営陣にも「至大ノ」影響力を及ぼし、“居直り”“脅し文句”等を発する末期の拓銀等でも散見された、いわば“大口債務者支配”の逆転の構図(最悪の場合、後任頭取選考にも相応の影響力を発揮する等)が末期の同行に見られたのではなかろうか。

以下、入手できた断片的情報の羅列にすぎないのであるが、担保物件ごとの債権保全策の強化に伴い、「遠藤組が担保物件として銀行に出していた土地建物の処分が開始され」(白井, p106) て、最後に遠藤の“落城”に至るまでの時々刻々の衰退過程を年代順に見ていこう。ここで最も注目される以下の3件の1年以内に起った連続的事件の間に介在したであろう相当因果関係を推測して、最も合理的に説明しやすい「解」を想像してみたい。

①明治44年3月14日遠藤組贈賄事件に関する東京地裁有罪判決。②明治44年12月23日「連帯金借ニ因リ」農貯抵当権設定登記。③明治45年1月20日船商松本頭取の逃亡事件。

①の判決の結果、遠藤組首脳陣は「疑獄事件にひっかかり…入獄」(白井, p64)、「遠藤組は社長以下が疑獄事件に連座することになり、没落の過程に入る」(白井, p83)。「遠藤組にとって処分も嚴重であり、公共工事の一切が指名停止となった」(白井, p89) のであり、官庁工事の指名停止は当然に収益源であった大口特命工事の喪失を招き、遠藤組の信用失墜をもたらした。当時内部にいた従業員の白井にも「遠藤組は全く斜陽となり」(白井, p89)、上司「深山も近い日に遠藤組から離れるのではないか」(白井, p95)と思わせるなど、社内に動揺と混乱を招き、やがて社外にも情報は拡散する。その結果、大口融資先の農貯が従前の甘すぎた信用貸付等の債権保全強化策として②の担保の悉皆徴求を強行したと考えられる。①と②との間に約9ヵ月も要したのは「高尾神社は…故障に依り担保物件中に記入せざりし」(東日①)といった類の遠藤側の激しい抵抗、物件が「外二〇筆…海神土地…五日市土地…外五六筆、二和土地…外四八筆」(不登②)と地目が山林など宅地以外の物件を多数含み、区裁(現法務局)管轄も異なるなど広範囲に及ぶ広大な担保物件の共同担保目録作成等の煩瑣な登記事務に手間が掛かって、年末にギリギリ間に合ったのであろう。

問題は一ヵ月以内の②と③との間の因果関係の有無である。頭取の純粋に個人的諸事情による場合を別とすれば、頭取の職務遂行上の重大な過失等の職責を痛感しての現実からの逃避である可能性が高い。「已むなく他の重役にて行務を執り来り」(M45.4B) との文面からは「他の重役」でさえ錯綜した事情を解せず狼狽の様子が見て取れる。原因が単に遠藤組への大口融資の焦付だけであるなら、永年にわたる役員会での行内決裁

37) 38) 原判決『大審院刑事判決録』第20輯、中央大学、大正3年, p1257, 1246。

39) 大正13年10月『大阪銀行通信録』p122～。

の累積結果として通常は総会を期に潔く引責辞任すべき事案と思われる。

そこで以下は単なる筆者の想像の域を越えないが、一つの仮説を提起したい。すなわち塩田の共同経営等で懇意な遠藤から窮状を懇請され頭取が行内正規手続を経ずある種の与信行為（例えば支払手形への裏書等）に及んでいた可能性である。年末の農貯抵当権設定の原因たる「…連帯金借ニ因リ」（不登②）を遠藤の農貯借入に対して船商も連帯して偶発債務を負うものと解した。①の信用失墜が②の農貯の保全強化を促し、船商側に優良担保を含む悉皆担保徴求への全面協力を強いたのである。船商が永年確保していた優良担保等の第一順位を農貯に譲渡した事実から、事を急ぐ農貯側の優位、船商側の劣位は明らかである。年末の登記完了は明治45年正月明け以降に当該事実が行内外に露見する段取りを意味し、最高責任者たる頭取への追求が必至である。もし船商側の大幅譲歩の原因が行内で極秘裏に敢行された頭取個人の責めに帰すべき何らかの“不法行為”等に起因するならば、③の気弱な頭取が居た堪れず逃亡した合理的説明になろう。

最後に遠藤の没落過程で大口借入先の船商と農貯2行の間に何らかの連関があったか否かという未解明の課題が残る。遠藤自身が公金預金受入に尽力するなど、いわば運命共同体的な船商の債権回収は概して微温的だったが、同様な傾向の農貯も大蔵省の検査以降、風向きが急変した節がある。船商は大正6年7月末疑獄事件が発生し重役が投獄され、同年9月3日営業停止を命じられた。一方農貯の母体・農銀でも大正5年11月中山頭取が退くと6年7月以降大蔵省が中山時代の放漫経営にメスを入れ始め、大正9年9月27日農貯は臨時

休業に追い込まれた。遠藤が一時監査役を兼ねた東洋コンプレッソルを創業した私人集団⁴⁰⁾の背後に中山の影が見え隠れするが、遠藤と中山とに何らかの人的交流があったと仮定すれば、両行没落過程に中山の盛衰が影響する可能性が出て来る。中山が頭取在任中は遠藤への取立が船商流に微温的だったため半死の遠藤がしぶとく生き延び続けたといった仮説は成立しないだろうか。

V 遠藤邸の競落と遠藤組の東京移転

遠藤組の凋落を広く世間に印象づけた出来事は大正5年12月5日①遠藤邸が代物弁済取得による抵当権抹消後、遠藤から船商へ移転（不登②、台帳）されたことであった。新聞にも「同建物及屋敷は遠藤組より船橋商業銀行に三万余円の担保として提供しありたるも、期限満了し担保流れとなり、遂に船橋商業銀行の手に渡りしもの」（東日①）と大きく報じられた。この①遠藤邸競落と関連して②松遠塩田が柴田柳三郎へ売却、③遠藤組東京支店建物が中野喜三郎⁴¹⁾へ売却、④合資会社遠藤組が③の旧東京支店内に設立され、⑤競売・差押等を免れた遠藤個人財産が新社へ移転されるという大きな動揺が同時発生した。いわば“本丸落城”と平行し各地の“砦”も敵の手に落ちていく中、死守すべき最重要“砦”で“お家再興”の旗揚げをする、まるで戦国絵巻の如きドラマの最高潮を思わせる。

船商が主務省に大正6年9月提出した『上申書』では「去七月中、田中源三郎ナル者ノ刑事事件突発致シ、其証拠書類トシテ当銀行ノ諸帳簿…検事局ニ差出シ…未ダ書類ヲ返還ヲ受ケズ」（上申）

40) 「事業兎角振はざりしが、四十二年三月外人等悉く引退し」（『日本之精華』大正3年、p76）た取締役ロバート・ルウネンは中山佐市が取締役を兼ねた門司船渠（門司興業と改称）取締役で、共に共通の私人集団が創業し問題を起こした外資系企業。

41) 中野喜三郎は中野組頭取、勿来軌道社長、帝国石材、勿来炭鉱、赤井炭鉱、茨城軌道各取締役、水族館監査役、東京花崗石商組合頭取ほか。

と「田中源三郎事件」で検事局の捜査を受けた事実を認めた。同行の息の根を止めた一連の疑獄事件の発端となった田中こそ「整理困難に陥りたる同銀行は、直に同<遠藤>屋敷を売却し行務整理の一部に供せんと、其売却方を…依頼」、「売買両者の間にありて、斡旋の労を執りたる同町元町会議員、船橋商業銀行株主・田中源三郎」（東日①）であった。専門知識の乏しい小規模な銀行にとって複雑多岐に亘る大口競売を実行する行内の業務負担は想像を絶する重荷である。現に大正6年2月13日船商は海神、九日市の塩田を岡山県の豪農・井上毅に1.8万円で売買契約、保証金2,000円を受領したが、「期日到来せるも其手続を為さず」（T6.4.29東日）訴訟となっている。厄介でデリケートな業務だけに債務者だけでなく銀行自身の信用失墜に繋がり兼ねず、顧問弁護士や地元精通者等、行外者の支援・助言が不可欠である。船商も大正6年3月30日の総会で「塩田邸宅等ヲ金三萬五千円ニテ売却スルコトヲ承認シコレニ関スル報酬並ニ当整理費等ノ特別支出ヲ可決」（船商#38）し、「同銀行は、直に同屋敷を売却し行務整理の一部に供せんと、其売却方を前記田中源三郎に依頼したるものにして、船橋町に於て目下専ら風説され居るは…（中略）…醜聞紛々たる船橋商業銀行に関係し居る丈に事件は益々拡大して疑獄を惹起すべき形勢なり」（東日①）との醜聞を生んだ。この「報酬…整理費等ノ特別支出」に善意の支援者を装う所謂“整理屋”“競売屋”等と俗称される非合法プロ集団の介入・暗躍を招きやすい危険な社内外の環境が醸成されたかと解される。

まず③の東京支店（神田区千代田町）が同業・中野組へ売られた件だが、大正5年11月12日遠藤

組も加盟の任意設立の東京土木建築組合は準則組合として公認され、初代組合長に中野組の中野喜三郎が就任し、時を同じくして組合事務所を新たに旧遠藤組事務所に置いた。もし遠藤組の全盛期に遠藤も組合幹部に就任するのなら支店の一部を組合に便宜供与しても何ら不思議はない。しかし落城のドサクサに「遠藤君蔵氏所有の遠藤組事務所を買収するに決し、一部を改築し組合事務所たらしめ、その費用は悉く中野氏の私財を以て支弁」⁴²⁾との記述はいかにも不自然である。真相は不明だが、船商ら債権者による遠藤名義不動産の差押回避策ではなかったかと筆者は推測する。遠藤と中野との関係は真の盟友か否かは不明だが同業、組合員同士であるにとどまらず、福島県石城郡の近接した炭坑主同士でもあった。とりわけ石城郡窪田村字勿来に中野炭鉱部石炭採掘所を擁し、勿来軌道社長をも兼ねた中野は大口荷主たる沿線の炭坑出炭量を日々注視する立場から遠藤のヤマの惨状を当然に熟知していた。

組合史がわざわざ「悉く中野氏の私財を以て支弁」と特記した所以は中野組合長の“俠気”、即ち債鬼に追われ窮状にある遠藤の懇請で義理人情に篤い中野がポケットマネーで東京支店建物を買収して組合事務所とし遠藤側の継続使用も当面黙認したのであろう。

推測でなく事実として商業登記簿で確認できるのは遠藤邸の落城から僅か4日後の12月9日遠藤を代表者とする合資会社遠藤組が東京市神田区千代田町4番地、即ち旧東京支店の所在地に急遽設立されたことである。第二会社と見做した理由は当該営業目的が遠藤の従前の個人事業の領域である「一、土木建築請負業、一、鉱山採掘及鉱物売買、一、山林伐採及木材製作并其売買、一、

42)『東京土木建築業組合沿革誌』東京土木建築工業組合、昭和12年、P46。

労力供給請負、一、物品供給請負」(商登①)を広くカバーするからであった。そしてほぼ同時に従前遠藤個人名義であった各種財産を債権者による差押回避のためか合資会社遠藤組名義に変更したことは、例えば上遠野鉱山(登195番)の鉱業権の移転(『鉱区一覧 第14次』と『鉱区一覧 第13次』との対比)から窺える。

中野は東京支店にも差押が迫るのを知り、恐らく直前の11月中に建物所有権を遠藤から買い受け、船橋を追われた遠藤組がここで自家再興の旗揚げをする拠点を暫時用意してやったのではなからうか。もちろん敵側の銀行の立場に立てば、遠藤と事情を通じた中野との共謀による仮装売買を疑い、担保権実行の阻害行為と映って訴訟沙汰ともなりえよう。

次に新聞で「事件は愈々拡大し意外の辺に飛火せるものの如く…形勢益々錯綜して同銀行に関連せる船橋鉄道株式会社及中山村葛飾郡軌道会社にも波及するならん」(T6.7.28東日)と報道されたように、単に遠藤邸・塩田等の遠藤の地所だけでなく、同時併行的に船商融資先である東葛人車鉄道、船橋鉄道等の整理・処分・換価にも洋鉄商・柴田商店主の柴田柳三郎なる「当銀行対柴田柳三郎約束手形金請求事件」の原告が関与した模様である。遠藤邸は大正5年12月船商が代物弁済取得後、大正6年3月31日柴田半七(合名会社柴田保全社代表社員)へ売却された。(台帳)当時、大戦景気の中で鉄材価格が異常に高騰、洋鉄商にとって大量のルールを保有する私鉄は業績とは一切無関係に“上得意”と見做された。私鉄首脳陣と結託してルールを線路から引き剥がし高値で最終処分すれば巨額の利鞘が獲得できたので、同時期同県内にも銚子遊覧鉄道等突然廃業

した零細私鉄も出てきた。関連資料を得て柴田らの一連の不可解な行動をさらに深掘りできれば、一定地域内の銀行、鉄軌道の連鎖破綻前後に暗躍したであろう特殊専門家集団の知られざる実態に迫り得る可能性もあるが、紙面も尽きたので他日を期したい。

VI 遠藤組のガバナンス不全

現時点での筆者の見解としては遠藤組は陸軍部隊が展開した京葉地区にタイムリーに本拠を置いていた偶然の幸運に恵まれ特命の官庁工事で一時の高利潤に与った勢いで、古参幹部の反対を押し切り日露戦後景気に無理な多角化に走ったものの、大枚を叩いて貧鉄を掴んだのが蹉跌の元凶と考えた。もとより確証となる文書も残らず、財務分析も適用できぬ中で多くは筆者の推測にすぎないが、遠藤がリスクを回避し得なかった主因をガバナンス機能の不全にあると解した。すなわち遠藤が北関東に留まり「羽生身内」二代目を継いだ養子なら先代を筆頭に親族、古参組員の監視下に置かれたが、新天地で旗揚げした結果、桎梏なく経営できた。会社組織なら大株主等の掣肘を受けるが、法人格なき個人企業体ゆえ遠慮は無用。多数の組員を擁すれば今なら労組等にも気配りが要るところ、封建色の残る請負業では親分子分関係に基づくリーダーシップで万事制御できた。また監督官庁等の行政指導も当時は緩かった。強いガバナンスとなるメイン行モニタリングも大口保証金を預けて船商を懐柔、頭取と昵懇となり自家薬籠中の金庫に換えた。白井は船商は「遠藤組の主要取引銀行であったため…取付騒ぎが起き…遠藤組の巻ぞえで…潰れた」(白井,p106)と

分析する。最後の砦は知患者揃いの支配人の忠告だが、「創業時代の精神から離れて誠実さを欠いた」「遠藤組そのものの経営方針に不満を持つ」（白井, p82）に至った小島は明治40年10月配下の両組格闘事件を始末した直後、高齢の故と支配人を辞した。職を賭して「よい仕事を真面目にやり、社会的信用をえなければ事業は長続きしない」（白井, p82）との諫言すら遠藤は聞き入れず暴走した公算が高い。農業県で確たる産業なく企業家も乏しい千葉で畏敬される存在となった遠藤は“偶像”視されるにつれ、各ステークホルダーの統治も弛緩、本人の自制心も慢心で失せた。白井はトップに相応しい「教養…態度風采」を欠き、「大きなところへは眼がとどかない」遠藤は「そこらが限界」（白井, p89）の経営者と見た。遠藤が多角化という本業以外で冒険を敢行し「自分が考えていたより大きくなってしまった」（白井, p89）のは地元でのシェアが高く、本業だけでは成長が限られたのであろう。また未経験分野ゆえ周辺の介入もないとみたかもしれぬ。先代の愛妾ともども地盤を譲られた幸運児に過ぎぬとのやっかみを排し、是が非でも遠藤一人の功績也と認めさせたいとの強い意図も感じられる。こうした遠藤の強引な遣り方を白井は「企業はただ儲けさえすれば何でもよい」（白井, p82）貪欲と解したが、不用の古煉瓦を塀に積んだ遠藤邸がランドマークとなった如く、実力以上に英雄視されたことを重荷に感じたのが真の動機かもしれない。この虚実のギャップを一挙に埋めるべく日露戦後の起業熱に煽られリスクを承知で一攫千金を夢見て常磐のヤマを買い漁った可能性もあろう。

最後に仮説の域を超える筆者の単なる憶測だが、乾坤一擲の大勝負に出た際に船商以外の銀

行筋からマイナスのガバナンス作用が生じた可能性、即ち中山佐市に教唆煽動されたか否かである。千葉県の僻陬の地に生まれ独創的な秘策⁴³⁾を弄して急激に財を成した中山は当時農銀の革新者と謳われ「信用と勢力を以て尊敬せらる」（辞書, p304）“偶像”であった。しかし内実が顕れ内紛に発展し辞任、一転大蔵省から追求され“落ちた偶像”となった。中山と同様の経過を辿るも今なお地元船橋⁴⁴⁾で英雄視されるなど毀誉褒貶の定まらぬ遠藤にも筆者は“落ちた偶像”との枕詞を冠した所以である。

もとより限定された少数資料に遭遇したにすぎない中間的生産物ゆえ、本稿では仮説以前の段階にとどまった農貯と中山佐市の醜関係の有無の解明等々、数多くの課題が今後の検討事項として山積している。今後の一連の研究の方向性を示せば、かつて塩田経営者が保有した干潟がその後京成など幾多の観光資本の盛衰を経て現在の巨大海浜リゾートに転成していった単なる敷地継承のみではない連続性を、観光経営史・地域産業史等の観点から身近で見聞きし得た同時代人として探求し論じたいと念じている。

43) 明治39年東農銀は他行を買って府庁内に移し改称、中山は農貯を「全く中山佐市独自の経営」（辞書, p304）即ち規制外の“ノンバンク”的機関銀行化した。府からの無利子預金を元手に利鞘を一味で享受する私利的スキームを創出、職権を利用して蓄財に励んだ。野依秀市は取材で「農工貯蓄銀行なる紛らひき銀行を設け…支配人なる地位を利用し…

銀行の金を貸付けてコンミッションを取る「不都合の行為」（M44.5.5東朝⑤）と見抜いた。

44) 末筆ながら郷土史家の綿貫啓一氏、船橋市西図書館の前澤智明氏らの各位には郷土史の文献所在等に関して種々ご教示を賜った。

The Risks of Diversification Faced by a Railroad Contractor in the Late Meiji Period

Case Study of the Downfall of Kimizo Endo, the “Fallen Idol” of Funabashi, Chiba Prefecture

Isao Ogawa

As a railroad contractor based in Funabashi, Chiba Prefecture, Kimizo Endo made his name in the local community with his fast-growing railroad construction business. His company, which also handled public works projects open to designated bidders, operated mainly in Chiba Prefecture and was characterized by the superb construction capabilities inherited from a group of skilled professionals with expertise in flood control on the Tonegawa River in the Hanyu region of Saitama Prefecture.

Endo began diversifying by initially branching out into safe business fields, such as army purveyors and small railroad freight services, using the money accrued from excess profits. Aiming for easy earnings, he gradually expanded into high-risk ventures in which he had little experience, namely the real estate development of vast tracts of mountains, woods, and salt pan lands, and eventually the development of coal mines in faraway Joban. This whirlwind of business diversification was financed through multiple large loans from various lenders, such as the Funabashi Commercial Bank in Chiba and the Noko Savings Bank in Tokyo, but such loans also weakened the company’s financial position. Endo invested heavily in coal mining and built a railway for transporting coal, but the business proved a massive failure due to the poor coal quality of his mines and also the impact of mine collapses. To make up for these

losses, Endo bribed officials to win a government construction contract that was beyond his company’s means and, completely losing public confidence, jeopardized even his mainstay business.

But despite everything, Endo is remembered in his hometown as a tragic hero who suffered a sudden and mysterious downfall, perhaps because his diversification projects were largely pursued without the public’s knowledge. As the “fallen idol,” Endo’s failure was of his own making, due partly to ignoring the sound advice of his more cautious executives and allowing himself to be influenced by Saichi Nakayama and other such radicals. His demise can also be attributed to the reckless diversification strategies he pushed through without adequate preparations or procedures in place. After the 1917 downfall of Endo, a one-time owner of a luxurious mansion standing in front of Keisei Station in the bustling commercial area of Funabashi City, many local businesses suffered the same fate, including the salt pans development, Funabashi Commercial Bank, Tokatsu Handcar Tramway, and Funabashi Railway.

